

博物館・動物園で学究は続く



「高校で教わった化学の先生にあこがれて化学の道に進んだ」と坂本稔さん

千葉県佐倉市にある国立歴史民俗博物館(歴博)の教授(文化財科学)坂本稔さん(50、1984年卒)は、静岡学園が中高一貫を始めた年に入学した1期生だ。友人関係でうまくいかず、校長室に呼ばれたときのこと。当時の校長が栄養ドリンクを差し出してくれた。「あの光景は今でもよく覚えています」

東京大学に進学し、同大大学院で地球化学を専攻。地震や火山のメカニズムを分析した。博士号を取得した後、歴博へ。「分析対象が地球から歴史資料や考古資料に変わっただけです。歴博には自然科学系の研究者が少なくないという。

今は「放射性炭素年代測定法」による分析に主に携わる。生物が大気から取り込んだ放射性炭素の濃度は、死後、次第に低下する。その減り具合を測定して経過時間を割り出すのがこの測定法だ。例えば、遺跡から出土した土器。「土器の様式などから、考古学の年代分類で、新しいか古いかは分かっても、何年前とはなかなかいえない」。しかし、土器にこびりついたおこげ(炭化米)を分析すれば、具体的に何年前か分かる。

歴博はこの測定法を使った調査で、2003年、弥生時代の始まりは従来の説より500年早い紀元前10世紀にさかのぼるとの見解を発表し、大きな議論を呼んだ。坂本さんはこの研究チームの一員だった。「測定では予想と違う数字ばかりが出る」という一方で、「ほかの分野の先生と協力して、その数字の意味を明らかにするのがおもしろいところですよ」。

センター講師(博物館学)の佐渡友陽(ともひら)さん(42、92年卒)も中学から6年間、静岡学園で学んだ。京都・奈良への高校の修学旅行では、しおりのとりまどめを任せられた。日本史好きが高じて、分厚い2冊の資料集になった。

物理や化学も好きだった。進学した東京大学では、生態学を学んだ。「生物を数学的にとらえる」というものだ。動物に関する情報の流れをテーマにした卒論を書いたことをきっかけに、動物園とのつきあいが始まった。

同大大学院の修士課程修了後、静岡市役所に就職し、市立日本平動物園で8年間を過ごした。動物園が社会の中でどうあるべきか、行政の中でどう扱うべきかについて、現場で考えた。

8年のうち1年間は、姉妹都市交流のある米国ネブラスカ州のオマハ市で派遣研修。全米屈指の動物園があり、寄付金などの資金集めや、ボランティア育成といった教育普及など、最先端の動きを見ることができた。

昨年4月から現職。動物園経営などを専門に研究している。「寄付金で上手に回している欧米の動物園に、追いつき追い越せと、夢がある分野だと思えます」



静岡学園では「男ばかり30人、担任も替わらずに6年間を過ごしました」と佐渡友陽(ともひら)さん